《学級経営》

よりよい人間関係を育む学級経営
～ソーシャルスキルトレーニングを活用して～

那覇市立宇栄原小学校教諭　新川　美紀

Ⅰ　テーマ設定の理由

今日，少子化・核家族化が進み，人との関わり方を身につける機会が減少している。そして感情のコントロールが不得手なためにがまんができない・他人の気持ちを察することができない・仲間作りがうまくできない子が多い傾向にある。「生きる力」を育むことが求められている今，よりよい人間関係を築くための技能（スキル）を高め，ともに成長していく力を培うことが大切だと考える。

今回の教育課程の基準の改善のねらいの第１に「豊かな人間性や社会性，国際社会に生きる日本人としての自覚の育成」が揚げられている。また，小学校学習指導要領解説の特別活動編（平成 11 年５月）には,「学級活動の指導にあっては『児童の学校生活の居場所としての学級』という考えを重視し, 児童一人一人が自らよりよい生活を過ごせるよう援助する必要がある。」とある。このことからどの子にとっても「学校が大好き。学校が楽しい。」といえる居心地のよい学級づくりをめざす中で，人とのよりよい関わりを通して子どもたちの社会性を高めることが強く求められている。

今年度担当する学級は２学年である。お話好きで明るく屈託のない笑顔をみせる子が多い。しかし，２年生という発達段階上，まだまだ自己中心的な行動をとり友だちとコミュニケーションをうまくとれない子がいる。また，善悪の判断もまだ難しく「だって…」という言葉で言い訳をする子や，人の話を聞くことが苦手な子，消極的で引っ込み思案の子もいる。この子どもたちを，友だちのよさに気づき，だれとでも仲良く助け合う子へと育てるために，学級集団で人との関わり方を学ばせたい。

そこで，基本的な人間関係を形成・維持していくために必要なソーシャルスキルトレーニングを授業の中に計画的に取り入れ，よりよい人間関係を育む学級経営の在り方を研究したいと考え，本テーマを設定した。

Ⅱ　研究目標

低学年児童のソーシャルスキルを高めていくために，ソーシャルスキルトレーニングを意図的・計画的に実施し，検証・考察することにより，よりよい人間関係を育む学級経営の在り方を研究する。

Ⅲ　研究仮説

子ども理解をもとにソーシャルスキルを選択し，関連する教科等でソーシャルスキルトレーニングを意図的・計画的に行い，一人一人のソーシャルスキルを高めれば，学級のよりよい人間関係を育むことができるであろう。

変化
の希薄化

方法

間関係を育む

る学級では

ことができ

個性を発揮

もは，友た

験する。そ

自分のよ

学年は体験

感情や考え

りよい人間

ナーとし

であ

うことが

いができ

ので，

どもたちには

が必要で

のルールとして身

ーズ

にする

た子どもたちの発達

築くために，

体験

ソーシャルスキルトレー

入れ，よりよい人間関

係

組む。

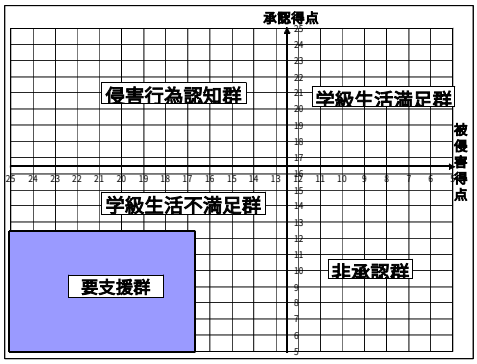
2 ルスキルについて

ャルスキル(social skills)とは，日常の社会生活場面

するとどうなるかといった予測

に，自分の感情

表２　学級満足度尺度のグラフ



(2) 評定尺度法

子どもの日常の言動を知る教師が信頼性・妥当性の確認されている評定尺度を用いて評定する方法である。

①学級満足度尺度（表２）

子どもが学級にどれくらい満足しているかを測る尺度である。「承認得点」「被侵害得点」の２つを合わせて測定する。「承認得点」は学級の中で自分が認められているという思いを測る。「被侵害得点」は学級の中でいじめや悪ふざけなどを受けているという思いを測る。「承認得点」の合計を縦軸，「被侵害得点」の合計を横軸に取ってグラフに表し，子どもたちの学級への満足度を４つの群に分類し，プロットの散らばり具合も判断材料となる。

〇**学級生活満足群**―学級内に自分の居場所があり，学校生活を意欲的に送っている子である。より右上にプロットがくる子がその傾向が強い。

〇**侵害行為認知群**―自主的に活動するが少し自己中心的で，他の子とトラブルがある可能性の高い子である。

〇**非承認群**―いじめや悪ふざけを受けている可能性は低いが，学級内で認められることが少なく，自主的に活動することが少ない子である。

〇**学級生活不満足群**―いじめや悪ふざけを受けている可能性が高く，学級の中に自分の居場所が見いだせない子である。**要支援群**はこの中でも特にその不満傾向が強く，早急に対応を考えなければならない子である。より左下にプロットのくる子がその傾向が強い。

②学校生活意欲尺度

友達関係・学習意欲・学級の雰囲気などの，子どもが学校生活の中のどの場面について，特に意欲を持っているかを把握する尺度である。この２つの尺度を測ることのできるものとしてＱ－Ｕテストがある。これは小学校３年以上対象とされており，今回，対象が２年生であるため，内容は変えずに文言を低学年用に書き換えて実施する。そして自然観察法などの結果と合わせて実態把握をすることで妥当性が図れるのではないかと考える。

(3) 自己評定尺度法（ソーシャルスキル尺度）

河村茂雄著の「グループ体験による学級育成プログラム小学校編」の中に記されている「学級生活で必要とされるソーシャルスキル尺度」を使って調査する。これは学級生活を良好に送るためのソーシャルスキルのポイントをまとめたもので，配慮のスキルとかかわりのスキルの２種類のスキルから成り立っている。学級の平均値が学級に確立されているルールの目安となり，どんなルールが確立していればよいか，そのルールを学級内で一人一人がどのくらい活用しているかを知ることができる。この方法は，自分をある程度客観視できる能力が要求されるため，低学年には難しいので，文言を低学年にわかるように易しい言葉に直して教師が読み上げ，説明しながら回答させることにする。

①配慮のスキル

対人関係を営む上でのマナーである。自他の人権を尊重する姿勢が行動レベルでどれくらい実行されているかを見ることができる。

②かかわりのスキル

配慮のスキルを前提にして，クラスの友だちと能動的に関わるのに必要なスキル。学級

生活に高い満足感をもっている学級ではこの２種類のスキルの得点が全体の平均値よりかなり高い。逆に子どもたちが学級生活に満足していない学級では両者の得点は全体の平均値よりかなり低くなる。特に学級崩壊の兆候を示している学級ではその傾向が強い。

(4) 自己監視法

日常の出来事を子どもに日誌のように記録させる方法。例えば,「あいさつをした」が生じた日にち，時間，その相手，状況，それに対する当人の印象などを記録させる。

４　学級の実態と指導計画の作成

表３　　ＳＳＴ実施前の学級集団

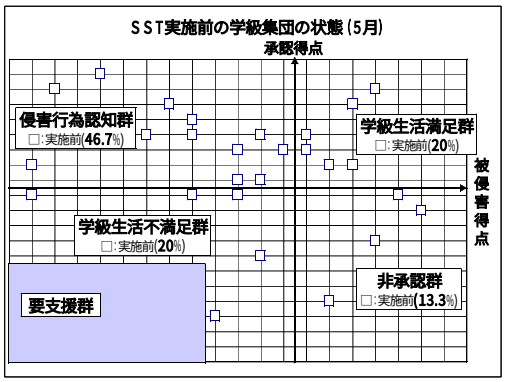


表４　実施前の配慮のスキルレベル

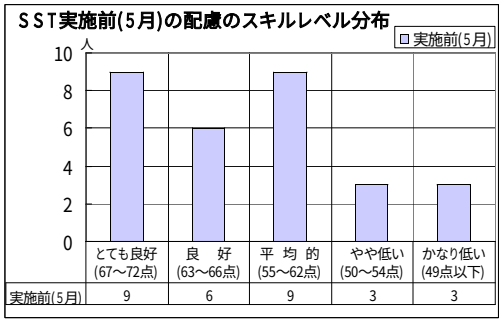
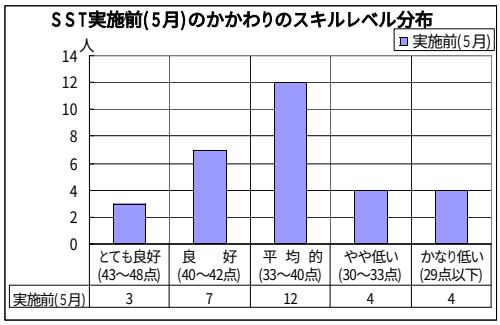


表５ 実施前のかかわりのスキルレベル



(1) 本学級の児童の実態

①５月初めに実施した評定尺度法の『学級満足度尺度』の結果(表３)によると，本学級は「学級生活満足群」が 20 %と少なく，学級の約半数 46.7 %の子どもが「侵害行為認知群」に属していた。侵害行為認知群が優位である状態は一般的に，子どもの活動意欲は高いが，子ども同士の関係がやや希薄で，小グループ間のトラブルが発生しやすい状況と考えられる。担任が注意しても反抗的な態度を示す子が多く，私語や忘れ物が多かったり，担任の指導が学級に行き渡らない状態と言われている。

②表４･表５の自己評定尺度法の結果では，学級の平均値は配慮のスキルが 60.3 点，かかわりのスキルが 36.3 点と平均的なスキルを持っているが，大きな集団として活動することがうまくできず，協力することが苦手である。

③自然観察法での実態把握でも，２つの測定法の結果と同様に，一斉授業の中で集団で活動すると支障がでることが多い。相手の話を最後まで聴いていれば，勘違いせずにケンカにならなかったといった些細なトラブルが頻繁におこっている。また意思表示の上手下手の差も大きく，自己主張の強い子はのびのびと振る舞い，気の弱い子は気後れしている。ふれあいのある人間関係が教師と子どもの間にとどまり，子ども同士の関係ができていない。

以上のことから，みんなで学級生活を楽しむための基本的なルールの確立が必要である。授業を受ける姿勢や話す・聞く態度，他の人との関わり方など集団で活動・生活す時に基本的なマナーや，学校の決まりにそって自分のしたいことをするソーシャルスキルを，ルールのあるゲームやルールを守る体験を繰り返しながら具体的にを学ばせる必要がある。

(2) 定着させたいソーシャルスキル

よりよい人間関係を育てるためには，子どもたちが，学んだソーシャルスキルを行動に移すことにより，友達との関係が良好になったという体験が必要である。子どもたちが成功体験を繰り返し味わえるようにする必要がある。今回，子どもたちに学ばせるスキルは，具体的で実

行しやすいものに限定し，対人関係形成・維持スキルのあいさつ・自己紹介・上手な聴き方と主張性スキルの仲間の誘い方・仲間の入り方の５つを取り上げる。特に上手な聴き方は，各教科においても重要であり，学校生活や日常生活での人間関係においても大きな役割を持っている。これが苦手な本学級の子どもたちには，特に必要である。２学年の目標や学習内容をふまえながらＳＳＴを活用して教科の授業を行い，学習したスキルを日常生活で繰り返し練習するようにする。そのＳＳＴを活用することで，自己理解・他者理解を図り，みんなで仲良く遊んだり協力したりすることのよさを感じ取らせたい。

(3) 指導計画の作成

今回、子どもたちに学ばせるスキルは各教科・領域等においても基礎・基本であり，低学年という発達段階からも発展的・系統的指導ができるようにし，複数の教科・領域で繰り返しトレーニングすることが，より効果的だと考える。各教科等でＳＳＴを行うには，教科・領域の指導内容やねらいを達成しながらＳＳＴを実施することが必要である。またスキルを教える際に，以前に学習したスキルを基礎に相互に関連させつつ，次のスキルが積み重ねられるようにした方が効果的である。学級経営は学校の教育活動全体で行うものであるから，朝の会・帰りの会も視野に入れて計画を立てる必要がある。

(4) ＳＳＴ実践上の工夫

ＳＳＴの実施にあたっては，子どもたちに「やってみよう」「もっとやりたい」と感じさせ，「できた」という体験を積み重ねることが大切であるので，次のような視点でＳＳＴを計画する。

①配慮のスキルの基本的な聴く態度とかかわりのスキルの基本的な話す態度を組み合わせた内容を少人数で，レクリエーション的な要素を含めながら行うようにし共有できるソーシャルスキルを１つずつ増やしていくようにする。

②絵やフラッシュカードを用いて板書(写真１)を工夫しスキルのポイントを具体的・視覚的に理解させる。

写真１　　板書の工夫

③トレーニング終了後，図１のような実践プリントを与え，学習したスキルを日常場面で実行するように促す。

ＳＳＴの最終目標は日常生活で意識せずに自然とできるようになることである。毎回授業後に実践プリントを渡し，学習したスキルを日常場面で継続実践するように促す。その際，低学年であるので毎日の実践を楽しみながらできるように，色分けや記号によって自己評価させ，実践についてのふりかえりは，１週間分をまとめて文章で書かせるようにする。

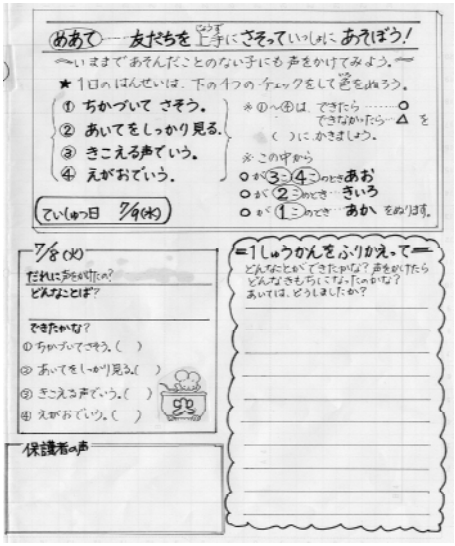


図１　　実践プリント

④学習したスキルの実行が支持される環境を整える。家庭での実施を奨励し，実施後の様子や感想・報告を依頼し，支持的環境をつくる。家庭と連携を図り，子どもたちを双方から支援する意図で，ＳＳＴ通信(図２)を毎回発行し，ＳＳＴの目的や内容，取り組み状況や保護者の声を知らせる。

⑤学習したスキルを日常場面に応用しやすくするために，児童の日常生活に起こり得る場面をトレーニング計画に組み込む。学んだスキルを日常生活での継続実践に結びつけるために，授業展開の中で言語や行動による説明や模倣・練習する場を設け，集団でのゲームや遊びを使って模擬実践する活動をできるだけ取り入れ，実践意欲を高めるようにする。

以上の手だてを通して，一人一人のソーシャルスキルを高め，だれとでも助け合って活動する子の育成を図る。

平成１５年度宇柴原小学校　２年２組　　Ｈ１５.６.２６（木）

おはなししようよ！　No. １１

～ソーシャルスキルトレーニング通信～　発行者　新川英紀

おもしろかった？「かもつれっしゃ」

先週の１９日。「かもつれっしゃ」という曲を使って、「**曲の**構成要素の一つである、**速さに気をつけて聴きながら**・・・さらに**身体表現をする。**」という実は高度なことをしていたのです。

２年生の音楽科では、
＊拍の流れやフレーズを感じ取って演奏したり身体表現したりする。
＊リズム、旋律、速さに気をつけて聴く。
という、学ぶ内容があります。先週のソーシャルスキルトレーニングではこれを同時に学びながら取り組んでもらいました。

私はいつも、「楽しみながら学ぶべきことを体で覚える」ことができればいいなあと思っています。そのために、ただ遊ぶのではなく、その学年で身につけておかねばならないことがうまく学べる遊びやゲームを上手に授業に取り入れようと考えてやることが多いです。そしてさらに同じ１回やるならば、次の時に、またはその後の別の学習でも、もっと欲を言えば実生活の中で使えるようなものにしたいなあと思うのです。

前回は、①２年生の音楽の学習内容
②子どもたちの人との関わり方に対するスキルの向上
③実生活上で子どもたちが続けてやれそうなもの
この３つを満たすものをゲームでやろうとしたのですが・・・。
毎時間いつも・・・という訳にはなかなか、そううまくいきませんけど、子どもたちと会えるせっかくのチャンスは生かしたいなあと思うのです。

さて子どもたちはどう感じたのでしょうか・・・。

いっぱいつながったから、たのしかった。じゃんけんをしたからたのしかった。	かもつれっしゃをやって、たのしくて、リズムにのれました。とってもおもしろかったです。

　　さんは、ちゃんとリズムに気をつけることがわかっていますね。いっぱいつながることが楽しいと感じている　　くんは、おおぜいの人で遊ぶことの楽しさを肌で感じたようです。楽しいと感じることが、「次、またやろう。」という意欲につながります。

図２　　ＳＳＴ通信

５　学級経営に生かすソーシャルスキル トレーニング年間指導計画案

ＳＳＴを教育課程内で行うにはその内容と，学校行事や各教科・領域等の年間指導計画や指導内容との関連を図る必要がある。ＳＳＴを取り入れることでより効果的に教科等の学習や活動ができ，ソーシャルスキルも計画的に育てることができるように配慮した。

「あいさつ」「自己紹介」は，仲間関係の形成を援助するスキルであり，学年当初に重要である。その後に会話を維持するスキルである「上手な聴き方」や「質問する」のＳＳＴを行う。対人関係の問題は，新学年となって１ヶ月ほどしてから生じてくることが多いので，トラブルの予防・解決や親密になるためのスキルである「仲間の誘い方・入り方」は仲間関係を深めさせたい時期に行うと効果的である。また継続的なＳＳＴになるように１学期間をひとまとまりとし，同じ流れで同じスキルを繰り返し取り入れて定着を図る。１学期は学級の教育力を育てるためにも大事な時期であるので同じスキルを繰り返すように計画した。同じスキルも学級の実態を見てレベルを変えて実施し，子どもたちが楽しく取り組める工夫をする。以上の配慮事項をふまえて以下の計画を作成した。

月	取り上げるソーシャルスキル	学校行事	学級における主な取り組み	関連する教科・領域
4	・あいさつ ・自己紹介 ・上手な聴き方	・始業式　・入学式 ・家庭訪問　・遠足	・学級開き ・子どもの実態把握 ・基本的な学習や生活のきまり	[道徳]明るくあいさつ　礼儀２－① [国語]きょうりゅうとあそびたい
5	・上手な聴き方 ・質問する	・学級保護者会 ・なかよし集会	・個に応じた細かい指導(聞く,話す読む,書く,発表する,話し合う)	[国語]はっきりとした声で [生活]ぼうけん，はっけん，町たんけん
6	・上手な聴き方 ・仲間の誘い方	・平和集会 ・運動会	・気になる子どもへの個別対応 ・健康で安全な生活指導	[体育]集団行動 [特活]学級で一緒に遊ぶ計画を立てよう
7	・仲間の入り方	・個人面談　・終業式 ・夏休みの事前指導 ・学級お楽しみ会	・学級お楽しみ会の取り組み ・１学期のまとめ ・夏休みの計画づくり	[道徳]友達っていいな　友情２－③ [音楽]音がくにあわせて
9	・自己紹介 ・上手な聴き方	・始業式 ・読書月間	・生活リズムづくり ・読書月間の取り組み	[国語]二人で話そう [生活]町となかよし
10	・質問する	・校外学習	・一人一人が落ち着いて取り組める学習環境作り	[道徳]助け合って　友情２－③
11	・仲間の誘い方	・ありがとう集会	・友達を増やし，力を合わせる仲間づくり	[道徳]いっしょに遊ぼう　親切２－② [生活]みんなでつくろうフェスティバル
12	・仲間の入り方	・学級保護者会・終業式 ・学級お楽しみ会 ・冬休みの事前指導	・２学期のまとめ ・学級お楽しみ会の取り組み ・冬休みの計画づくり	[音楽]ようすをおもいうかべて
1	・自己紹介 ・上手な聴き方	・始業式 ・校内書き初め会	・生活リズムづくり	[国語]おもちゃの作り方をしょうかいしよう
2	・質問する ・あたたかい言葉かけ	・学芸会 ・なわとび大会	・学習指導の徹底と充実	[音楽]みんなであわせて [生活]あしたへジャンプ

3	・あたたかい言葉かけ	・６年生を送る会 ・卒業式・学級お別れ会 ・修了式・離任式	・学級お別れ会の取り組み ・１年間のまとめ ・春休みの計画づくり	[道徳]相手のことを考えて　礼儀２－①

Ⅵ　授業実践

１　題材名　　仲間にいれて！（学級活動－(2)）

２　題材について

子どもたちにとって学校の楽しさは友だちとの関係が大きく左右し，休み時間に友だちとする遊びは，大きな楽しみである。学校生活のいろいろな場面で友だちと仲良く活動できることは，子どもたちにとっても，よりよい人間関係の形成や友人関係を広げ，だれとでも助け合っていく子の育成においても重要である。

本学級は協力して活動するよさを感じている子が少なく，グループも特定の子と組みたがり，遊びの輪が広がらない傾向にある。子どもたちは，すでにできている集団に入ろうとするとき，拒否されるのではないかという不安が伴い，うまく仲間に入れないと，疎外感を感じたり，いっしょに遊ぶことをあきらめたりすることが多いようである。

ＳＳＴの技法を用いて，仲間に入ると「友だちからいろいろ教えてもらえる」「協力してできる」「グループで遊べて楽しい」などのよさがあることを気づかせ，具体的な遊びの場面での声かけや行動をみんなで話し合い，仲間に入るには言葉をかけたり，状況に応じて言葉かけを変える必要があることに気づかせたい。遊びに誘ったり誘われたりするときの自分の声かけや言われたときの気持ちを考えることを通して，知識や具体的なコツ・技術を学ばせるようにする。一人一人が模倣・練習する場を取り入れ，仲良く過ごすための声かけの仕方を知り，活動を振り返らせることで今後の言動についての自己決定を促し，日常生活でだれとでも仲良くできるように自主的・実践的態度の育成を目指したい。

３　指導目標

〇友だちを誘ったり仲間に入るときの気持ちを共感させる。
〇一人一人の仲間に誘ったり，入るためのスキルを高める。
〇日常生活での実践化へ向けて仲間に誘ったり入ったりする意欲付けをする。

４　事前指導

〇友だちとの関わりの中で，普段の言動や思いについてアンケートをとる。

５　授業仮説

遊びの場面での受容的な言い方や自分の意志を伝える知識や技能を練習の過程で習得させれば，仲間の誘い方や入り方がわかり，友だちの仲間に入りたがる気持ちを理解できるであろう。

６　本時の展開

段階	場面	学習活動	★指導上の留意点　●評価の観点	資料等
導入	インストラクション	《問題を持つ》 1.アンケート結果や，２枚の絵(仲間と楽しく遊んでいる子と一人でみんなの遊びを見ている子)をみて，普段の言動から問題点を考えさせる。 2.一人でいる子が仲間に入るとき，どうしたらいいか考える。	★アンケートの結果から，うれしい言葉や行動だけでなく，言われて悲しくなった言葉や行動にも気づかせ，学級における共通の問題として意識させる。 ★言葉と行動に分けて考えさせ，自分の言葉で発表させる。	・アンケート結果と２枚の絵を提示する。 ・言葉と行動のフラッシュカード。

展開	モデリング	《気づく》 3.モデルを出して，言語的側面，非言語的側面の確認をする。 4.仲間に入れてもらう時に気を付けないといけないことはないか考える。	★教師が子どもたちが考えた言動の中から２つ程度できている例をやってみる。 ★教師のモデルをみて，良い点・気を付ける点を発表させる。 ★タイミングも重要であることを押さえる。 ★「仲間にはいる時のポイント」をまとめる。	・話型を黒板に明示。
	リハーサル	《体験する》 5.グループに分かれて仲間に誘ったり入るための練習をする。 6.みんなの前で練習した『仲間の誘い方や入り方』を発表する。 	★５人が遊んでいる所に，他の１人が仲間に入るようにしたり，声をかけて誘ったりする。６人が１回ずつ交代する。 ★一人一人の仲間の入り方をチェックシートに記録させ，直した方がいい所を教え合わせる。少しでも上手にできるようになった子には，大きな拍手をする。直した方がいい所があると言われた子は，何回も挑戦していいことを確認する。 ●自分から友だちを誘ったり，仲間に入る方法を試みることができる。(技能・表現) ★１～２のグループに実際に行わせ，上手にできた所を発表させたり，改善点を出させる。	・各グループにシートと鉛筆を配布する。
終末	フィードバック	《振り返る》 7.グループ活動を通して，仲間に入る言葉かけをして，友だちに「いいよ」と言われた時の気持ちや断られた時はどうしたらよいか発表する。 8.仲間に誘う時や入る時，どんな言葉や行動をとりたいか，自己決定させる。	 ●自分にできることを具体的に考え，決めることができる。　(技能・表現)	・ワークシート

7　事後指導

○意欲を持続させ，多くの実体験を味わわせるために，実践プリントを与え，学習したことを日常場面で継続実践するように促す。

○毎日の実践を色分けによって自己評価させ，１週間の実践を文章で振り返って書かせる。

○授業の様子や子どもたちの実践状況を学級通信で知らせ，家庭と連携を図って継続的に実践させる。

8　本活動における評価規準

○技能・表現―自分から友だちを誘ったり，仲間に入ろうと試みることができる。

Ⅶ　結果と考察

研究仮説の検証

子ども理解をもとにソーシャルスキルを選択し，関連する教科等でソーシャルスキルトレーニングを意図的・計画的に行い，一人一人のソーシャルスキルを高めれば，学級のよりよい人間関係を育むことができるであろう。

【結果１】ＳＳＴ実施後の学級集団

表６は，ＳＳＴの実施前後(□５月◆７月)の学級集団の変化を表し，表７と表８は実施前後の学校生活意欲に対する変化である。

表６　ＳＳＴ実施前後の学級集団の変化

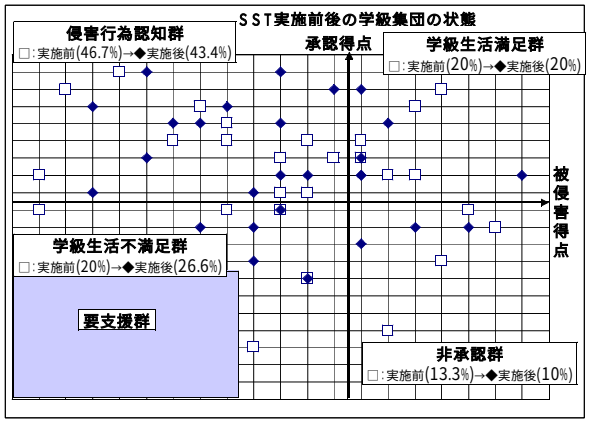


表７　学校生活意欲プロフィール

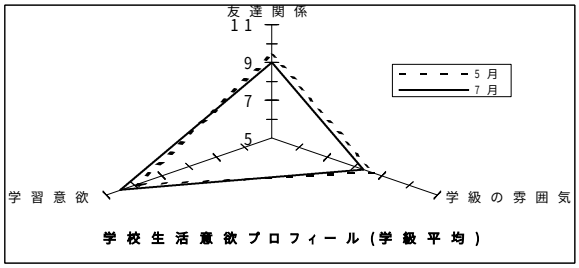


表８　学校生活意欲得点の分布

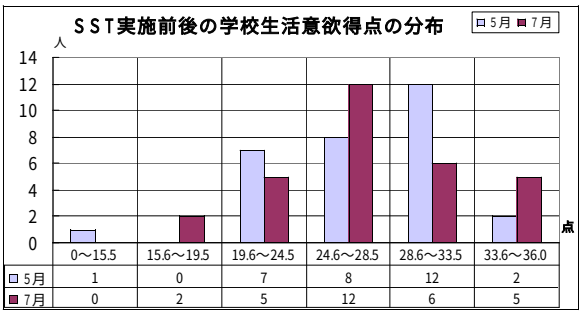


表９　配慮のスキル

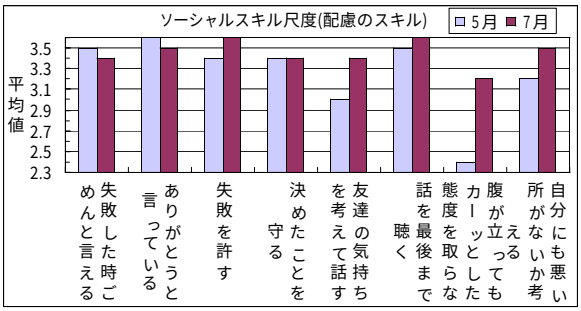
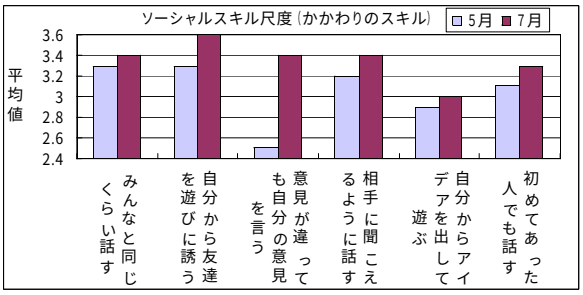


表10　かかわりのスキル



○表６では，実施前(５月)に比べると 46.7%から 43.3%とわずかであるが侵害行為認知群が減少している。

○実施後の７月は全体的に承認得点は上がっており，凝集性が見られる。

○表７の学校生活意欲を見ると，友達関係と学級の雰囲気についての得点が実施前より低くなっている。しかし，学習意欲やソーシャルスキル尺度は上がっている。

○表８から学校生活意欲得点の分布は，全体的に得点分布が上がっている。

【考察１】

学級生活不満足群が 20 %から 26.6 %に増え，要支援群が３人に増えている。学級の状態は，まだまだルールの確立ができておらず，トラブルの発生しやすい状態だといえる。これは，他の子と関わることでスキル不足によるトラブルの発生が原因と考えられるが，自己中心的な行動が多かった３人も他の子と同様に自分から関わりを持ち始めたことから，学級全体へのＳＳＴの効果はあったと考えられる。

【結果２】ソーシャルスキル尺度の結果

ソーシャルスキル尺度(表９･表 10)について学級の平均値をもとに実践前後で比較した。

○表９の配慮のスキル項目から，相手の気持ちを考えて行動することがかなりできるようになったと感じている。

○男女間やグループ外でのかかわりが乏しく自分から進んで行動を起こす子がほとんどいなかったが，授業や実践プリントで遊びや男女の交流，２人組からの小グループによるリハーサルやグループ活動を仕組んでＳＳＴをしたことで，かかわりのスキルが全体的に向上している。

○特に自分から声をかけて遊びにさそえる子が増えていること，意見が違っても自分の意見を言えるようになってきている。

【考察２】

ＳＳＴを授業の中で行い，獲得させたいスキルをトレーニングしたこと，挨拶や聴き方・話

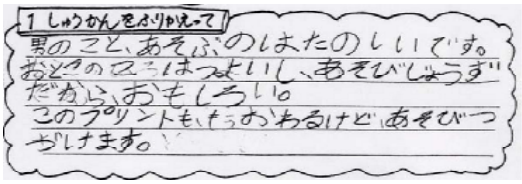


図３　１週間の振り返り

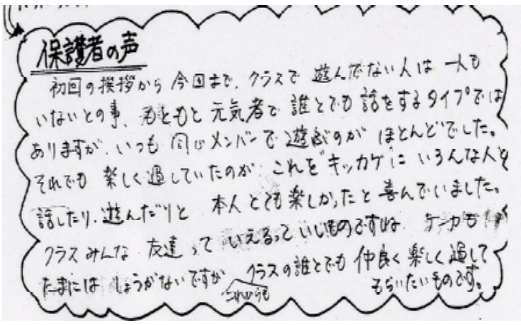


図４　　保護者の声

し方という基本的なスキルに絞ってＳＳＴを行ったことで，子どもたちの人間関係の向上が図られたと考える。

実践プリントの１週間の実践の振り返りでは，仲間に誘うスキルを使って一緒に遊び，楽しく遊ぶにはルールが大切であることを感じ取ったり，図３のように，今まで遊んだことのない男子と遊び，自分にない他者のよさを感じ取っている。その活動を通して，さらに継続しようとする意欲も出ている。また図４のように「保護者の声」の欄には，保護者の目で見た子どもの取り組みや感想等，家庭での１週間の様子を保護者の文章から感じ取ることができた。実践プリントでは単なるＳＳＴの定着だけをねらわず，子どもたちの学級での雰囲気や遊びを構成する集団の質を変化させることもねらった。ＳＳＴの回を重ねるごとに発表やリハーサルも意欲的に取り組むようになっていたことからプリント形式だけでなく，朝の会・帰りの会を利用して短い時間で継続的に取り組めるように方法も併用すれば，日常生活における実践が導けるものと思われる。

Ⅷ　研究の成果と課題

１　成果

(1) 学級満足度尺度やソーシャルスキル尺度を自然観察法と合わせて活用したことで，学級集団の状態や個別対応の必要な子がわかり，子ども理解を深めることができた。

(2) 話を聴くことが苦手な子や自分の意見を言えない子が多かったが，挨拶や聞く・話すのスキルに絞ってＳＳＴを行ったことで，自分から挨拶をしたり発表をする子が増え，遊びに誘うようになり，ＳＳＴはよりよい人間関係を育む上で有効であることがわかった。

(3) 実践プリントを使って実践化を図り，実践後の保護者や子どもたちの声を通信に載せることで，お互いのよさに気づいたり，家庭との連携を図ることができ，人間関係が良好になった。

２　課題

(1) 教科・領域のねらいを達成しながら，ＳＳＴを取り入れた授業を工夫する。

(2) 課外（朝の会・帰りの会など）の時間を活用した継続的実践の方法を研究する。

(3) 個別支援の必要な児童に対するＳＳＴの活用の仕方を研究する。

《主な参考文献》

文部省　「小学校学習指導要領解説　特別活動編」　東洋館出版社　1999
國分康孝　「育てるカウンセリングが学級を変える」小学校編　図書文化社　2001
小林正幸･相川充「ソーシャルスキル教育で子どもが変わる」小学校　図書文化社　2002